遠隔成績を改善する可能性が示唆された．

5）高度進行・再発食道癌に対する樹状細胞による特異的癌免疫療法

神田　達夫・海部　勉
劉　莉莉・牧野　成人
桑原　史郎・西巻　正（新潟大学外科学第一講座）
畠山　勝義
高橋　益廣・鈴木　力（同　保健学科）

樹状細胞は最も強力な抗原提示細胞であり癌ワクチン療法への応用に期待が高まっている．教室では，食道扁平上皮癌の腫瘍拒絶抗原として久留米大学の伊東らにより同定された SART－1 を標的分子とした樹状細胞ワクチン療法を本学倫理委員会の承認のもと，1999年11月より開始している．現在までに，4例の HLA－A24 陽性の高度進行・再発食道癌症例に対し行い，3例においてプロトコール治療を終了している．この新しい癌ワクチン療法の背景および治療の実際を概説し，現時点における本免疫療法の安全性，臨床効果について報告する．

6）鼠径ヘルニア手術時に発見された精巣女性化症候群の2例
－精巣はすぐに摘除すべきか？－

内藤　真一・新田　幸壽（新潟市民病院小児外科）
荒井　洋志
宮川　公子（同　小児科）

精巣女性化症候群は，染色体が46XY であるにもかかわらず，アンドロゲンレセプターの障害により，男児で精巣が存在しながら外性器が女性形を示し，伴性劣性遺伝をし，成人した後に不妊で診断される以外に，小児期の鼠径ヘルニアの手術時に発見されるものがある．本症に対して，悪性化の問題から除睾術を早期にすべきというものと，精巣から分泌されるエストロゲンの作用による二次性徴の発現する思春期以後まで待ってからにすべきというものと様々な議論がある．

今回，2例を経験し，術後の遺伝相談などでの問題を経験したので，報告する．

7）一期的腸吻合した壊死性腸炎の2例

深澤　基児・近藤　公男（太田西ノ内病院小児外科）
大沢　義弘

今回我々は壊死性腸炎に対し一期的に腸吻合をし，術後経過良好であった2例を経験したので報告する．

【症例1】25週4日，756g，胎児仮死のため緊急帝切で出生．日齢44に母乳を開始したところ，著明な腹満，腹部単純 X－p で拡張した腸管，さらに全身状態の増悪を認めたため，日齢48に緊急開腹術施行．回腸末端に一部漿膜が破綻し，impending rupture の所見がみられ，盲腸部分切除，回腸回腸端々吻合を施行した．

【症例2】37週2日，2290g，妊娠中毒症のため緊急帝王切開にて他院で出生．日齢1より経口哺乳開始したところ，日齢2に消化管穿孔が疑われ，同日緊急手術を施行．盲腸に5×5mm 大の穿孔を認め回盲部切除，回腸結腸吻合を施行した．

8）興味ある小児腸閉塞症

毛利　成昭・高野　邦夫
荒井　洋志・大矢　知昇
長坂　智・横須賀哲哉
芹沢　大・腰塚　浩三（山梨医科大学第二外科）
多田　祐輔

後天性に発生したと考えられる小児原発性小腸閉塞の2例を経験したので文献的考察を交えて報告する．

【症例1】5ケ月，男児．開腹歴なし．VSD，ASD にて根治術を施行．術後2時間30分血便にて発症．全身状態良好で検査上異常を認めなかった．第3病日血液検査の悪化，イレウス像を呈したため開腹した．バウヒン弁から50cm の回腸に強い炎症を伴う癒着性イレウスであった．

【症例2】15歳，女児．開腹歴なし．肋骨原発骨肉腫にて治療終了し外来通院中．腹痛にて発症し近医にてイレウスと診断された．腫瘍の腹腔内再発を否定しきれず開腹した．回腸に限局した線維性皮膜による癒着性イレウスで病理組織学的に悪性所見は認められなかった．

9）ヒルシュスプルング病に対する transanal endorectal pull-through を施行した3例

奥山　直樹・山際　岩雄
大内　孝幸・中嶋　和恵（山形大学第二外科）
加藤　博久・島崎　靖久

最近ヒルシュスプルング病に対する開腹，腹腔鏡を要しない transanal endorectal pull-through の有用性が報告されている．我々も本症の3例にこの術式を用い，良好な結果が得られたので報告する．

3例はいずれも rectosigmoid type であり，3才，19日，42日で手術を行った．術中迅速標本で，神経節細胞を確認し腸切除を行った．切除腸管の長さは，18cm，12cm，22cm で，手技はいずれも容易であった．いずれも第2病日に経口摂取を開始し，最初の2例では7病日，10病日に退院した．3例目は中枢性低換気症候群を